歳時記

ふるさと探訪

春竜胆（はるりんどう）

生涯は道草ばかり春りんどう　甲斐加代子

（寿大学文芸部十句集から）

リンドウは秋に咲くものが有名ですが、春に咲くことから名前はハルリンドウ（春竜胆）。

春の里山を歩くときは、何時もこのブルーの宝石のような花をさがします。

自分の一生は道草ばかりしていたと振り返る作者ですが、それもまた宝石のように大切な思い出になることでしょう。

今月の推薦句

伝統の米占いや種を蒔く　小野　恒己

日田の大原八幡宮の「米占」は無形民俗文化財とか。種蒔は晩春の季語、野菜や花の種を蒔くのは「物種蒔く」で区別します。

せがまれて見よう見真似の土筆煮る　井上　則子

土筆のレシピはたくさんありますが、ここでは卵とじでしょうか、佃煮でしょうか。中七が料理の愉しさを伝えています。

侘助や息を潜めて老いてゆく　原田　勝子

侘助は冬の季語ですが、花言葉は「控えめ」。中七の「息を潜めて」で句を雰囲気を変えました。思いを抑えた句のお手本です。

俳句の基本

思いを出し過ぎないこと

読者俳句

ふるさとの俳人たち　その③

飯田孤石（はんだこせき）

孤石は「明治四十四年に九重町大字粟野九四四番地に生を受く」と『飯田孤石全句集』のあとがきに記されている。本名は飯田清。八十八歳での句集である。氏は昭和十六年召集令状を受け戦地に赴き厳しい戦争体験を経て、終戦後、故郷へ帰還。戦後は職を求めて日田市に移住している。昭和二十九年から親戚筋の飯田一歩の薦めで俳句を始めている。俳号は記憶の中にあった父の俳号を受け継いだもの。俳号を名乗り始めて投句した句「ひなげしに蝶の呼吸の静かなる」が高点句で入選、その後も水原秋桜子の特選に選ばれることなどを契機に俳句にのめり込むことになったと記されている。最初の師は松本たかし、昭和三十年代は木村蕪城、上村占鮮魚らの指導を受けている。その後は金子兜太に師事し現代俳句協会で足跡を残す。次の二句は当時の代表作。

硬山（ぼたやま）さからわず濡れ坑夫弱る　昭和三十年代

託児所昼餉山の段畑父母ら光り　昭和四十年代

その後は「海程」「麦」「扉」などの俳誌にも投稿。俳壇で脚光を浴び受賞を重ねる。その後、昭和四十九年日田俳句会「竜舌」の編集長。平成に入ると大分県現代俳句協会の設立時の初代会長に就任し平成十年まで会の発展に寄与している。以下の句は、故郷九重での作句。

花合歓や青嶺そびらに父祖の村

野ぐみ赤し甘し妻子と来し枯野

佳作　十九席

地籍調査春疾風のリボン色　香澄

春を呼ぶ復興列車見送れり　ヨウ子

里の宮葉桜となり山のぼる　左世美

良寛忌かごめかごめの鬼となる　豊國

待ってれば来そう来るかも梅八分　律子

雛の朔ゆふの森号発車式　直人

ひとしきり笑いころげて花菜風　末子

猟師岳石楠花谷の深さかな　泉

咲き競ふ桜菜の花無人駅　桐友

花冷えや我を励ます独りごと　八千子

ジェット機の静かな飛行彼岸西　重吉

珈琲の香に誘われて春炬燵　次江

反り返る片栗の花朝日待つ　ヤスコ

遠き人思い出せない朧の夜　一主

春暁の夢の尾を引く蹠（もが）きかな　いづみ

好きなだけ枝を伸ばして山桜　純子

故郷の土手は今ごろ犬ふぐり　良子

コロナの禍しばし忘れて河津桜　好美

高原に春を告げるや菜種梅雨　文雄

（選者・評）隣の集落岩の上に大分県現代俳句協会の創始者がおられたとは思いもよらぬことでした。誌面の都合で紹介はできませんでしたが飯田孤石全句集の「あとがき」の戦時での赤裸々な記述には感動でした。県立図書館や町の図書館に句集は寄贈されていますので。機会がございましたらぜひご覧ください。（こじりゅうしょう）

5月号の締め切りは、4月23日（必着）でお願いいたします。選者（古後粒勝）宅にハガキ等で直接送付いただいても結構です。住所（九重町大字粟野1414番地）

発行・九重町役場企画調整課
〒879-4895　大分県玖珠郡九重町大字後野上8番地の1
☎ 0973-76-2111
印刷・尾花印刷有限会社

VEGETABLE OIL INK　広報ここのえは、環境にやさしい再生紙と植物性インクを使用しています。
UD FONT by MORISAWA　広報ここのえは、UD文字を使用しています。